

北海道豊富高等学校

課程 全 日 制
学 科 普通科
生徒数 87名

1 事業のねらい

本校1学年の生徒は、約7割が地元の同一の中学校から入学しており、本年度は、中学校において不登校もしくは、不登校傾向を有していた生徒が2割程度在籍している。また、ここ数年の入学生は社会性や規範意識に乏しく、望ましい人間関係を主体的に構築できない生徒が多く、小・中学校において形成された人間関係のまま高校生活を送っている傾向が見られることから、学年として学級経営や集団づくりに苦慮する場面が多くなってきた。これまでも、特別支援教育や集団カウンセリングについて校内研修を実施し、生徒指導（生徒理解）の充実を図るなど、学校の教育活動全体を通じて社会性や豊かな心の育成に取り組んでいるが、今後、一層効果的なコミュニケーション能力の育成に取り組む必要がある。

このような現状を踏まえ、本校では、幼少期より固定化された人間関係が見られる小規模校におけるコミュニケーション能力の育成を図ることにより、自己開示や他者理解に基づく望ましい人間関係を構築することを目指す。

2 取組の経過

6月
・外部講師（北海道医療大学 富家准教授）による、1学年の授業観察と情報交換の実施。

7月
・外部講師による、校内研修（「中1ギャップ・高1クライシス問題に対応するため」）と集団カウンセリング（「強い心とは何か」）の実施。（豊富中学校との連携）

8月
・担当教員の集団カウンセリング研修への参加。
・ピア・サポートの実施。
・学級環境適応調査の実施及び分析（第1回）を通した、本校生徒の実態把握。

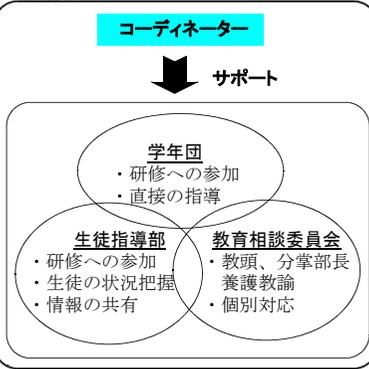
10月
・外部講師による、授業観察と教員との教育相談の実施。

12月
・外部講師と本校教員によるピア・サポートの実施（豊富中学校との連携）

1月
・担当教員の集団カウンセリング研修への参加及び校内における研修内容の普及。（集団カウンセリングの実施の定着化）

2月
・外部講師による校内研修、本校教員と町内中学校教員を対象とした構成的グループエソカンターと集団カウンセリングについての体験型研修（豊富・兜沼中学校との連携）
・学級環境適応調査の実施及び分析（第2回）
・新年度へ向けての取組の検討

<組織図>



3 主な取組の内容

1 ピア・サポートトレーニングの実施

【実施日】 平成22年12月6日（月）

【対象】 1学年（25名）

【内容】 集団カウンセリング研修を受講した担任と外部講師が協力してピア・サポートトレーニング「プラスのストローク」を実施した。生徒全員による活動とグループ活動を上手く組み合わせながら担任が進行し、外部講師が生徒に対して適宜助言を行いながら、生徒は概ね積極的に取り組んでいた。

【生徒の主な感想】

- プラスのストロークの言葉をかけてもらうと、自分も相手も良い気持ちになることがわかった。
- 自分では気付かなかった言葉が沢山あった。
- 自分の気持ちを伝えることで相手をうれしい気持ちにできることがわかった。
- グループの中で話し合っている時がすごく心地良かった。



2 教員研修会

【実施日】 平成22年7月5日（月）

【対象】 本校教員11名

豊富中学校教員3名

【内容】 北海道医療大学富家准教授を講師に招き、教員研修会、「中1ギャップ・高1クライシス問題に対応するために」を実施した。社会的な現状の他、中1ギャップや高1クライシスの原因、コミュニケーションスキルの目標とその方法論、中高の連携力を高めることの必要性やICTを活用した学校間連携について理解を深めた。

【成果】 研修を実施したことで、幼少期から固定化された人間関係の中でコミュニケーション能力を高めるためには、中高が連携した取組の重要性を再認識することができた。



【実施日】 平成23年2月21日(月)

【対象】 本校教員11名
豊富中学校・兜沼中学校教員5名

【内容】 北海道医療大学富家准教授を講師に招き、構成的グループエンカウンターや集団カウンセリングの体験的な研修を実施した。

【成果】 中・高校教員が連携して体験的な研修を実施することで、参加教員が構成的グループエンカウンターや集団カウンセリングに対する抵抗感がなくなり、早期から生徒の自己開示や他者理解を高めるための取組を推進するきっかけとなった。



4 成果と課題

【成果】

○ 学級環境適応調査の適応次元の比較分析(6項目中5項目でポイント増加)

・教師サポートの伸びが大きく、教師サポート→向社会的スキル→友人サポート→非侵害的関係の連鎖が比較的順調である。

○ 集団カウンセリング研修への参加や校内研修の実施

・各種研修会を実施したことにより、教師側の生徒に対する傾聴姿勢が確立され、生徒と教師の信頼関係が構築された。

・教員の集団カウンセリングスキルが向上したことにより、生徒一人一人の実態を的確に捉えられるようになったことから、学校全体でより一層情報の共有化を図ることができるようになった。

・自己開示や他者理解に不安を抱えた生徒が多く見られた当該学年が、外部講師によるピア・サポートトレーニングなどの実施によって、落ち着いた雰囲気のもと授業が行われるようになった。

○ 望ましい人間関係の構築

・授業において、積極的な発言や他者を理解する言動などが見られ、徐々に高校生として望ましい集団が構築されてきた。

【課題】

○ 中学校の時より規範意識は高まっているが、学級環境適応調査の適応次元の比較分析において、生活満足感が1ポイント低下していることから、望ましい集団生活の在り方について一層理解を深めさせる必要がある。また、生活満足感が大きく低下している生徒に対して、個別のカウンセリングを実施するなど、一層きめ細かな対応が必要である。

○ 中学校や家庭との連携を一層深め、基本的な生活習慣や家庭学習の定着を図るなど、人間関係形成能力やコミュニケーション能力をさらに向上させる必要がある。

○ 教師サポートのポイントが上昇していることから、馴れ合いにならないよう望ましい関係を維持する工夫が必要である。

項目	7月	2月	増減
学習的適応	53	54	+1
教師サポート	51	57	+6
友人サポート	51	52	+1
向社会的スキル	52	54	+2
非侵害的関係	49	50	+1

【次年度に向けて】

○ 全教員の研修への理解を一層深めて積極的に研修に参加することにより、生徒に対する個人面談などを効果的に実施するための集団カウンセリングスキルの向上を図るとともに、きめ細かな集団カウンセリングを実施して、生徒の望ましい集団生活の在り方について、一層理解を深めさせる。

○ 小中高の連携を一層深め、系統的に生徒の実態を早期に把握して、生徒の特性に応じた小グループによる構成的グループエンカウンターを実施するなど実効性のある取組を推進する。

○ 成果の普及に向けて、道内・管内の高等学校はもとより、家庭や地域により広く情報を発信していく。

○ 保護者アンケートを計画的に実施して、家庭における基本的な生活習慣や家庭学習の状況の把握に努めて、校内研修会において人間関係形成能力やコミュニケーション能力を高めるための具体的方策について検討する。

○ 地域との関わりの中で異年齢交流や社会体験等により自己肯定感や自己有用感を高め行動活性を高める取組を推進する。